第百十三章　アンドロイドだけの地球

第百十三章　アンドロイドだけの地球

【時】永遠二十九世紀

【空】地球

【人】Ｒｖ２６　ホーリー　サーチ　ミリン　ケンタ　住職　リンメイ
四貫目　お松　ノロタン　ミト

＊＊＊

戦闘の中心が市街地周辺に移動する。すでに市街地はアンドロイドが制圧していた。市街地周辺の公園や川沿いには桜の木が結構ある。平和な時代には人間もアンドロイドも仲良く花見をしたものだ。

しかし、今は人間とアンドロイドの最後の戦場だ。体力がない女や子供は紫花粉症でほとんど死に絶えた。なんとか紫花粉の感染を逃れた大人の男も戦意を喪失していた。それはもう子孫を残すための女がいなくなったからかもしれない。それでもアンドロイドの投降勧告に応じる者はいなかった。

桜の花が散り始めたころ、最後の戦闘が始まる。ビートルタンクとクワガタ戦闘機の羽ばたきが紫花粉の飛散を助長する。ビートルタンクはすぐさま地上に降りて戦車として無限軌道を

稼働させる。上空ではクワガタ戦闘機は高度をできるだけ下げずに羽ばたきながらヘリコプターのように静止して地上を睨む。いくら花粉の飛散を少なくしようともこのような状態が続けば人間は紫花粉に感染して全員死亡するだろう。

「ビートルタンクだけで何とか休戦に持ち込む。クワガタ戦闘機はいったん離れてくれ」

「分かった」

そのとき不思議なことが起こる。どこからかカブト虫とクワガタ虫の大群が現れたのだ。

「何事だ」

しばらくすると大群が空を埋め尽くして周りを暗くする。

「すごい数だ」

やがて桜の木にたむろし始める。

「あっ！」

拡大されたモニターを見ていたビートルタンクの操縦士が叫ぶ。

「花粉を食べている」

「密をなめているんじゃ？」

「間違いないか」

「確かに花粉を食べています」

「夜行性で森を住みかにしているカブト虫やクワガタ虫がなぜだ！」

原因は不明だが、どうやらビートルタンクやクワガタ戦闘機の羽ばたきから生じる独特の周波数に反応したようだ。これに気付いたビートルタンクのチーフがＲｖ２６に連絡を取ると興味を示す返事が届く。

「もしそうなら、ありがたい。すぐそちらに行く」

＊＊＊

「Ｒｖ２６がやって来る。人間の動向に注意しろ」

「その心配はありません」

ビートルタンクのチーフから連絡が入る。

「人間の生体反応が消えました。この付近で生体反応があるのはあの虫たちだけです」

時空間移動装置が現れるとＲｖ２６が降りてくる。チーフがＲｖ２６を出迎える。

「紫花粉は？」

「消えました」

Ｒｖ２６がカブト虫やクワガタ虫で黒く見える桜の木を観察する。

「この現象を詳細に分析しろ」

すぐさまチーフが肩から伸びるマイクに向かってビートルタンクの乗務員に指示する。

「もしカブト虫やクワガタ虫が紫花粉を処理してくれるなら大助かりだ」

Ｒｖ２６がチーフに微笑みかけるが、すぐ表情を元に戻す。
「もう一度確認しろ。人間は？」
「ここには人間はいません」
「そうか」
Ｒｖ２６が時空間移動装置に向かって走り出す。
「どうしたのですか」
「ノロの惑星に行く」
「待ってください。あなたはこの地球の最高責任者です。この出来事をミトやホーリーに報告するつもりなら私が行きます」
「勝手に最高責任者にするな」
Ｒｖ２６はそう言い残すと時空間移動装置のドアを閉める。すぐ回転が始まると時空間移動装置が消える。

＊＊＊

ノロの惑星の会議室で完全消毒を済ませたＲｖ２６の報告が始まる。参加者は宇宙戦艦とフリゲートの各艦長、ホーリー、サーチ、ミリン、ケンタ、ミト、住職、リンメイ、四貫目、お松、それにノロタンだ。詳細な報告が終了する。

「さて今後どうするかだ」
ミトが各艦長に告げる。ミトと同じ宇宙戦艦に乗船する艦長が口を開く。
「我々人間が乗艦している地球連合艦隊の隊員は約三千人です。男女の比率はおおよそ三対二。年齢構成は十八歳から六十歳。平均年齢は約三十五歳。紫花粉には感染していない。果たして地球に戻るべきかどうか」
ここで言葉を止める。別の宇宙戦艦の女性の艦長が立ち上がる。
「私は三番艦の艦長ヨーコと申します。艦長としてではなく個人的な意見として受け取ってください。私は地球に戻るつもりはありません」
これが意外な発言かどうかは分からない。なぜなら賛成の声も反対の声も上がらなかったからだ。一旦着席したこの艦長は発言を続ける義務があると感じたのか、再び立ち上がる。
「私たちは今や少数民族のような存在です。しかも原爆を投下したから、ある意味、野蛮な少数民族です」
沈黙が続く。しかし、頷く女性が現れる。
「かといって、このノロの惑星に住み着くことはどう見たって不可能だわ」
今度は男女関係なく全員が頷く。
「昔々、完成コロニーという人間が住める惑星があったと聞いたことがあります。伝説ですか？」

ノロタンが応じると思っていたが頷くだけなので、やむを得ずＲｖ２６が答える。
「確かにあった。しかし、約千年前に放棄された」
「もう利用できないのですか」
「男と女の戦争でどの完成コロニーも破壊し尽くされた」
「戦争が原因ですか……しかも人間の男と女の戦争ですか……修復はできないのですか」
一旦うつむいたヨーコがＲｖ２６を見つめる。
「修復には十万単位の人手……いやアンドロイドの協力が欠かせない。それに重機や資材が必要だ。ノロの惑星もなんとか元に戻そうとしたが、見てのとおりだ」
Ｒｖ２６がノロタンに視線を移す。
「Ｒｖ２６の言うとおり。五次元の生命体の攻撃でこの惑星は壊滅的な被害を受けた。人口も五千人を切った。人間とアンドロイドの仲が良好だと言っても、どうしようもない。たとえば新しい宇宙海賊船パンダを建造するのに百年もかかった」
ヨーコが崩れるように着席すると男の艦長が発言を求める。
「私は……」
「自己紹介はいい」
Ｒｖ２６が急かす。地球が気がかりなのだ。もちろんノロの惑星、というよりホーリーやノロタンのことも気がかりだが、とりあえず報告を済ませた。今はそれ以上に地球の今後の展開

を気にする。それを察したノロタンが席を立ってＲｖ２６に近づきながら発言を求めた男の艦長を制する。
「申し訳ないが発言はちょっと待ってくれ」
そしてＲｖ２６の手を握る。
「貴重な報告、ありがとう。俺たちは俺たちでなんとかする」
「すまない」
頭を下げるＲｖ２６に今度はホーリーが近づく。
「謝ることなんかない！謝らなければならないのは人間の方だ。人間が汚した地球を掃除してきれいな星にしてくれ」
他意のないこのホーリーの言葉が決定打になった。少なくとも各艦長は地球を離れることを決意する。
ホーリーがＲｖ２６に近づいて手を握る。
「すぐに地球に戻れ。見送りはできないが」
「また会おう！」
Ｒｖ２６が力一杯握り返す。
「約束してくれ。ホーリー」
「するする。するから手を離してくれ」

この光景を見た会議室の全員から笑いと拍手が起こる。

＊＊＊

今後のことについて再び会議が始まる。まず先ほど発言が中断された男の艦長が尋ねる。
「ノロの惑星もダメ。完成コロニーもダメ。どうしたらいいのですか」
『『決断と実行のその日暮し』ということになる。行動を共にするというのなら拒否はしないし歓迎する」
ホーリーの回答にため息が流れる。ここで先の艦長が発言する。
「しかし、我々の寿命はしれている。最高齢の六十歳の隊員はよく生きて四十年だろう」
「永遠生命保持手術を受ければ大丈夫だ」
ホーリーの言葉にヨーコが割って入る。
「本当にそんな手術が可能なのですか」
サーチが応える。
「今は不可能です」
「えっ！」
「でも大丈夫。私たちは永遠生命保持手術をするにふさわしい設備を持っていないだけなの。古いけれど幸い月に設備があるわ」

「そうですか！」
「ただし、子供を産むことができなくなります」
「不老不死を望んでいないと言えばウソになるけれど、やむを得ないと思います。三千人程度で地球のような星を見つけたり、あるいは廃墟になった完成コロニーを復旧するには何十年、何百年かかるか分からないわ」
「そのとおりよ。でも忘れないでください。生命永遠保持手術ができても、元の身体に戻す手術方法はないの」
「一方通行ですか」
サーチがヨーコの肩を叩くと視線をノロタンに移す。
「ノロタン。ノロの惑星の中央コンピュータをパンダに積む作業は完了しているんでしょうね」
「もちろん。でも、なぜそんなことを知っているんだ」
「わしが教えたのじゃ」
住職が立ち上がる。
「ノロタンは地球連合艦隊が結束しなければ地球の危機を回避できないと考えたのじゃ。しかし、宇宙海賊船パンダに不可欠な中央コンピュータを開発する時間や機材がなかった」
ノロタンが各艦長に深々と頭を下げる。
「結束させる余裕はなかった。やむを得ず、乱暴な仕方で人間とアンドロイドが乗艦する宇宙

戦艦を一隻ずつ破壊した。申し訳なかった」
「それで目が覚めたのじゃ。しかもミトがいたから、そのあと地球連合艦隊は和解して結束できたのじゃ」
「一撃だけしてすぐにノロの惑星に戻って中央コンピュータのパンダへの移設作業に取り組んだ。中央コンピュータがいないパンダはただの時空間移動船に過ぎない。地球の混乱を収拾するには強力な宇宙海賊船としてのパンダが必要なのだ」
「それであんな狂ったような行動を起こしたのか」
真相を知らなかったホーリーはノロタンの戦術に納得する。もちろん犠牲になった人間やアンドロイドに複雑な気持ちを持つと目を閉じる。
「ほかに方法がなかったかどうか、今思えば拙速な作戦だったかもしれない」
ノロタンが再び各艦長に頭を下げる。
「犠牲になった乗務員も平和を望んでいた。やむを得ない」
「しかし、地球の人間はすべて死んでしまった。人間とアンドロイドの共存共栄は実現しなかった」
ここでミリンが叫ぶ。
「紫花粉症のせいだわ。ノロタンの責任じゃない！」
「そうじゃ」

ここでミトがおもむろに発言する。
「さてアンドロイドの宇宙艦隊は地球に戻るとして、人間の宇宙艦隊はどうするかだ」
ミトの提案に各艦長が応える。
「カブト虫やクワガタ虫が来年も桜の花粉を食べてくれるとすれば地球に戻るという選択肢もある」
「しかし、地球は放射能に汚染されている」
「永遠生命保持手術を受けたところで放射能汚染から身を守ることはできないわ」
しばらく意見が続くが結論は出ない。沈黙を破ってホーリーが結論する。
「さあ、未来のノロの惑星探査に出発だ！」
海賊から拍手が起こるがミトは同調しない。ミトだけではない。宇宙戦艦の艦長やその乗務員も沈黙したままだった。そのとき地球に着いたＲｖ２６から通信が入る。
「健闘を祈る。ホーリー、また会おう！」
「ありがとう！必ず戻ってくる」
サーチも返信する。
「前に進むわ。後退はしない」
サーチがホーリーの腕を取る。ミリンもケンタの手を握る。リンメイは住職の数珠に指を絡ませる。新たな旅が始まることになる。

第百十三章　アンドロイドだけの地球